

招待論文

グループ・ダイナミックスと地域計画

GROUP DYNAMICS AND REGIONAL DEVELOPMENT PLANNING

杉万俊夫

Toshio SUGIMAN

学博 京都大学 総合人間学部助教授
(〒606-01 京都市左京区吉田二本松町)**Key Words:** group dynamics, mind, affluent society

「もの」優先の社会から「こころ」優先の社会への変化が説かれるようになって久しい。それは、いわゆる「豊かな社会」——ほとんどすべての人にとって、明日のパンを思いつい、明日の寒さを怖れる必要のない社会——が実現したことに起因する。豊かな社会は、1950年代アメリカに、1960年代西欧の多くの国々に、そして、1970年代にはわが国にも到来した¹⁾。それは、人類史的に、前人未踏の新しい段階であり、ガルブレイス²⁾がいち早く指摘したとおり、そのでいかに生活すべきかを改めて学習しなければならない社会であった(図-1参照)。

では、「こころ」を優先させる社会、とりわけ、「こころ」優先の社会における地域計画とは、いかなるものであろうか。もちろん、この遠大とも言えるテーマに対して十分な答えを用意するなど、筆者の力量に余りあるところである。しかし、いささか奇異に感じられるかもしれないが、この「こころ」という一見プライベートな世界に対して、筆者の専門とする集団論(正確には、グループ・ダイナミックス)の立場から、一つの視点を提供することができる。以下、まず、グループ・ダイナミックスの基本的立場について紹介し、これが、「こころ」の考察といかなる関係にあり、さらには、「こころ」優先の社会における地域計画のあり方にいかなる示唆を与えるのかを論じてみよう。

1. グループ・ダイナミックス

(1) グループ・ダイナミックスの研究対象

グループ・ダイナミックス(group dynamics)は、人間の集合体(group)を一つの全体としてとらえ、その全体的性質の動態(dynamics)を研究するとともに、集合体の全体的性質と集合体に属する個々人の心的世界

の間に展開される動的相互規定関係をも研究する学問分野である。グループ・ダイナミックスが研究対象とする集合体は、広範多岐にわたる。夫婦関係や恋愛関係にある2者集合体、仕事やスポーツをともにする小集団(という集合体)、何千、何万という人々から構成される組織(という集合体)、スタジアムを埋めつくす群集(という集合体)、あるいは、一つの地域社会の住民や日本という一つの国家のもとに生活を営む国民(とよばれる人々から成る集合体)、等々は、グループ・ダイナミックスが研究対象とする集合体の例である。地球環境問題や南北問題に直面する現在、宇宙船地球号の上に生活する数10億の人々を、一つの集合体として考察していくことも時代の要請である。

グループ・ダイナミックスの研究対象は、集合体の境界(その集合体に属する人間の範囲)が、当事者にとって認識可能な集合体に限定されるわけではない。敵対する2者(あるいは、2集団)を一つの集合体とみなして、敵対の構図を、一つの集合体の構図として考察することもできる。また、当事者には一つの集合体に所属しているという認識が存在しないような集合体も、研究者、あるいは、実践家としての立場からみて、一つの集合体として把握することが意味をもつとすれば、それもグループ・ダイナミックスの研究対象となる。

(2) 集合体の全体的性質と個々人との動的相互規定関係

グループ・ダイナミックスは、上に例示したような集合体を、常に、一つの全体としてとらえ、その全体的性質の動態を研究する。本稿では、「一つの全体としての集合体がもつ性質」を指す標語として、「かや」(蚊帳)という標語を用いることにしたい。多くの日本人にとっ

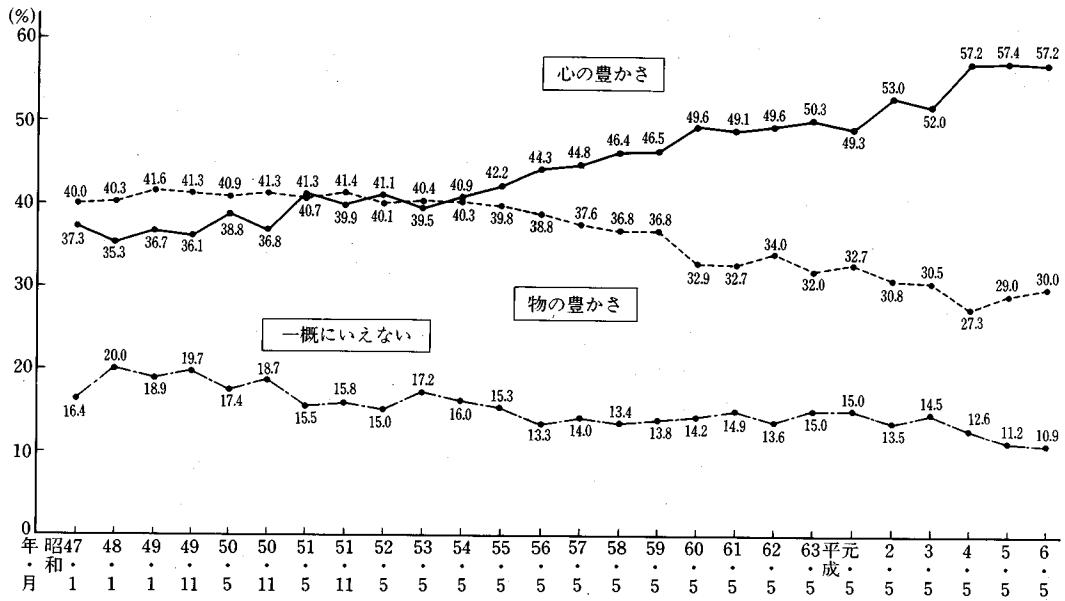


図-1 心の豊かさか、ものの豊かさか（総理府「国民生活」調査³³⁾）

「今後の生活の仕方として、次のような2つの考え方のうち、あなたの考え方方に近いのはどちらでしょうか。」

- (ア) 物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたい
- (イ) まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい
- (ウ) 一概にいえない

て、もはや、昔なつかしいふるさとの郷愁の中に没してしまった感のある言葉ではあるが、一度でも蚊帳の中夜を過ごしたことのある人ならば、蚊帳の内部が醸し出す、外部とは違った一種独特の世界をおわかりいただけるのではあるまいか。また、そのような経験を持たない人にとっても、「蚊帳の内、外」といった言い回しは、おそらく、日常会話のボキャブラリーに含まれているであろう。

「かや」という標語を用いて、グループ・ダイナミックの中心テーマ、すなわち、集合体の全体的性質と集合体に属する個々人の心的世界の動的相互規定関係を表現してみよう：あらゆる集合体は、何らかの「かや」に包まれている。「かや」に包まれている個々人は、「かや」に包まれているが故に、程度の差こそあれ、「かや」に規定される。しかし、どの個人も、その個人のすべてが「かや」に規定され尽くしてしまうわけではない。個人は、「かや」に規定されると同時に、様々なことを自由に感じ、考え、行動する。言い換えれば、個人は、「かや」に規定されると同時に、主体性をも発揮する。そして、一人一人が、程度の差こそあれ、主体性を発揮するが故に、その集積として、「かや」が変化する。すると、その変化した「かや」が、また、一人一人を（半ば）規定する。しかし、一人一人は、「かや」に規定されると同時に、主

体性をも発揮するので、その集積として、また、「かや」が変化する。その変化した「かや」が、また、一人一人を（半ば）規定し、——（以下、同様）。

「かや」という標語によって指される、集合体の全体的性質の具体例は、次節で述べることとし、その前に、若干のコメントを挿入しておこう。

第1のコメントとして、「かや」の標語に基づく集合体のイメージと、方法論的個人主義——まず、単体としての個人を指定し、その上で、個人間の影響過程や相互作用によって集合体の動態を把握しようとする視座——に基づく集合体のイメージの違いを明確にしておきたい。簡単な例として、朝、道で会って、「おはよう」の挨拶を交わす二人を考えてみよう。まず、方法論的個人主義の視座に立つならば、この光景は次のように描写されよう：友人Bに気づいたAは、「おはよう」という言葉をBに送る。Aの「おはよう」という挨拶に気づいたBは、それなりの心的プロセスを経た上で、Aに「おはよう」という言葉を返す。Aは、同じく、それなりの心的プロセスを経た上で、「今日は、早いね」とBに言葉を送る。云々。

一方、「かや」の標語に基づくならば、同じAとBの会話も全く異なるイメージでとらえられる。そもそも、AがBに「おはよう」という言葉をかけようとするの

は、すでに A と B を包む何らかの「かや」があるからである。その上で、A が B に「おはよう」と言ったとしても、それは、直接、B の心的過程に影響を及ぼすのではなく、A と B の両者を包む「かや」を変化させるのである。そして、その変化した「かや」が、B にも、また、「おはよう」を発した A 自身にも、影響を及ぼす。A に応えての B の「おはよう」も、決して、A に向けられたものではなく（仮に、B にはそう認識されていようと）、やはり、A、B 二人を包む「かや」を動かすのであり、その動いた「かや」が、再び、A にも、そして、B にも影響を及ぼすのである。同様に、A の「今日は、早いね」も、「かや」（B の心的過程ではなく）に変化を生ぜしめる、というイメージになる。

第2のコメントとして、ある集合体が「かや」に包まれているということと、その集合体が、集合体メンバー、あるいは、外部者によって、一つの集団として認識されていることとは、必ずしも一致しないという点を指摘しておきたい。もちろん、集合体が何らかの「かや」に包まれているが故に、一つの集団として認識されるという場合もある。しかし、「かや」に包まれているとしても、集合体メンバーには、一つの集団に所属しているという認識が存在しない場合もあるし、あるいは、一つの集団どころか、敵対する複数の集団として認識される場合もある。各種のゲーム論的分析は、利害対立（ないし、利害関係）を含む「一つの」集合体の状況を表現、解析する方法として有用である。

また、集合体メンバーが、いわゆる face-to-face の状況にあるか否かも、「かや」の指定の制約条件にはならない。例えば、文化や制度といった概念は、かなり長期的、かつ、広域的な視野に立った場合の集合体の「かや」と捉えることができる。あるいは、より短期的に、集合体をめぐる「状況」と呼ばれるものも、同様に、集合体の「かや」と捉えることができよう。

第3のコメントとして、そもそも、複数の個人にいかなる条件が満たされるときに「集合体」と呼ぶか、という集合体の定義上の問題に答えておこう。複数の個人に、何らかの「かや」を指定して論じることに幾ばくかでも意義が認められるとき、その複数個人は「集合体」と呼ぶことができる。この集合体の定義は、集合目標の共有、役割体系の存在、特定の機能的要件の充足、等々をもってする集合体の定義に比べて、はるかに緩やかなものである。集合目標の共有、役割体系の存在、特定の機能的要件の充足、等々は、「かや」の特殊的形態として把握可能である。

2. 「かや」の四肢的構造

本項では、「かや」——集合体の全体的性質——の構造

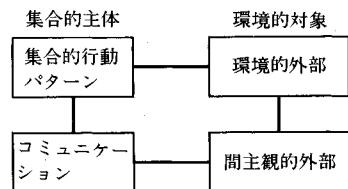


図-2 「かや」の四肢的関係態

的実態について述べる。まず、先走って結論を述べておくならば、集合体が「かや」に包まれているということは、集合体が、「コミュニケーション」としての「集合的行動パターン」を、「間主観的外部」としての「環境的外部」に対して織りなしている、ということである。以下、「集合的行動パターン」、「コミュニケーション」、「環境的外部」、「間主観的外部」のそれぞれについて説明する（図-2）。

(1) 集合的行動パターン

集合的行動パターンとは、集合体が一つの全体として織りなす観察可能な挙動の時間的・空間的パターンのことである。複数の個人に、単なる複数性を越えて、何らかの集団的、組織的、群集的、社会的な性質を見て取ることができるときには、その複数個人は何がしかの集合的行動パターンを織りなしている。集合的行動パターンの一例として、横断歩道上の歩行者群集が呈する帯状構造について紹介しよう⁴⁾。図-3は、信号が青になって60秒間たって信号が赤に変わるまでの、横断歩道上の歩行者総数と帯化指数（帯状構造の形成度）の推移をグラフ化した例である。いくつかの主要な時点における歩行者群の挙動を示しているが、白色（あるいは、黒色）の矩形の一つ一つは、一人の歩行者が2秒間に右方向（あるいは、左方向）に移動した空間を示している。図中No. 16から、横断歩道上に5本の人流の帯、すなわち、帯状構造が形成されていることがわかる。

このような帯状構造は、群集の中の個人、あるいは、群集の局部だけを見ていたのでは、決して発見できない。200人、300人という群集を一つの全体として、すっぽり視野に入れるという観察スタンスが必要である。帯状構造は、歩行者総数が少ないと形成されない。しかし、歩行者数が十分多ければ必ず形成されるというわけでもない。では、どういう条件が満たされれば、帯状構造が形成されるのか。その形成メカニズムを解明する鍵は、集合体の全体的性質である帯状構造の形成度と、歩行者個々人の歩行行動の間の動的相互規定関係に隠されている。歩行者個々人に着目すれば、その歩行行動は群集全体の帯状構造（の形成度）によって規定される。しかし、同時に、歩行者の歩行動態には、かなりの自由度が残されており、その自由度の使いかんによって、帯状構造

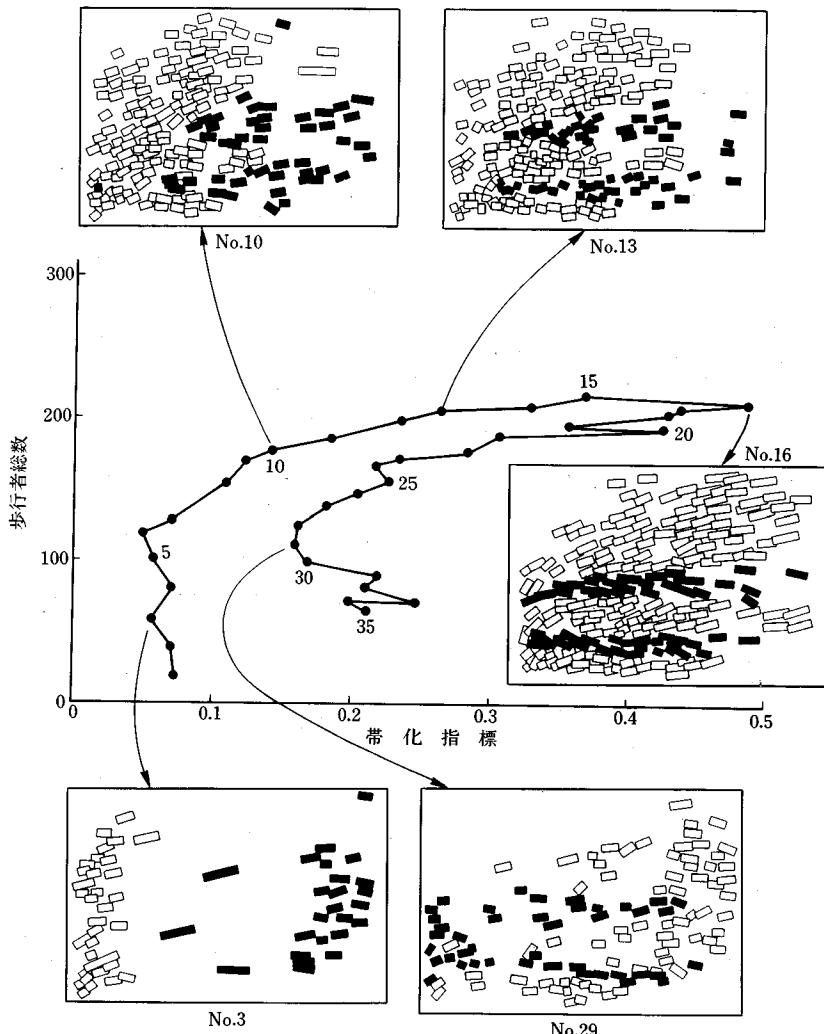


図-3 横断歩道の歩行者群集が呈する帯状構造

の形成が左右される。矢守・杉万³⁾は、この動的相互規定関係を明示的に組み込んだコンピューター・シミュレーションによって、帯状構造の形成プロセスを検討している。

(2) コミュニケーション

複数の個人が、単なる複数性を越えて、何らかの集合的行動パターンを織りなし、それをもって環境的対象に規定されつつも、同時に、環境的対象に働きかける集合的主体となるとき、主体としての集合体は、単に物的な集合的行動パターンを織りなすのみならず、すでにして、表情や言語によるコミュニケーションをも織りなしている。先に集合的行動パターンの例として挙げた帯状構造を織りなす歩行者群集にしても、その群集中では、体軀的表現によるコミュニケーションが織りなされ

ている。

では、そもそもコミュニケーション——もちろん、人間の集合体におけるコミュニケーション——とは何だろうか。それは、決して、個体間情報伝達と個体内情報処理といった用語で記述されるものではない。つまり、シャノン流の通信ではない。コミュニケーションの本質は、その字義どおり、「コミュ（共同性）」を形成することである。より正確に言えば、集合体の人々が、それに基づいて相通じ合えるような、暗黙かつ自明の諸前提を形成していくことである。既存の、暗黙・自明の前提に基づいて開始され、その前提を変容したり、消滅させたり（もはや、暗黙・自明の前提ではなくする）、あるいは、新たなる暗黙・自明の前提を追加したりするのがコミュニケーションなのである。重要なことは、ここに言う諸前提は、集合体に属する人々にとって暗黙・自明で

あり、したがって、それについて言及されることはないと意味において、当該の集合体にとって、それは完全な「外部」であるということである。また、同時に、それは、集合体の内部——集合体内部での会話、あるいは、集合体に属する人々の心的世界——が、まさに内部として生起、経験されるための母体的「外部」である。コミュニケーションを、会話に代表される対面的コミュニケーションに限定する必要は毛頭ない。例えば、朝、道で出会った友人同士が交わす「おはよう」の挨拶をコミュニケーションと呼ぶのは自然であろう。では、一人が、月曜の朝に、「おはよう」と声をかけ、もう一人は、それを完全に無視したが、翌週の月曜の朝になって、「先週、僕におはようと言ってくれたね」と応えたとしたら、この一週間をはさむやりとりもコミュニケーションではなかろうか。では、この時間間隔が、一ヶ月だったら如何、一年だったら如何、30年だったら如何。もちろん、このような時間間隔の差異が何の変化ももたらさないなどと言うつもりはない。しかしながら、時間間隔が一秒だったらコミュニケーションで、30年だったらコミュニケーションではない、とするのはあまりにもご都合主義的な定義としか言いようがない。翻って考えると、われわれは、時間間隔の面で長短さまざまなコミュニケーションを織りなしており、ある時点の個人は、長短さまざまなコミュニケーションの結節点に位置しているのではあるまいか。案外、われわれが、自分一人の頭の中の思考、あるいは、理論的に一步進んで、内なる他者との対話、と考えているのは、このような多様なコミュニケーションの結節点にいるということを内在的視点から述べているに過ぎないのかもしれない。

(3) 環境的外部

複数の個人が、何らかの集合的行動パターンを織りなすと相即して、集合的行動パターンがそれに規定されつつも、それに働きかける環境的外部を指定することができる。横断歩道上の帯状構造は、信号があり、白線で塗られた横断歩道があり、云々といった環境的外部に対して織りなされる。あるいは、農村に広がる田園風景と都会のコンクリート・ジャングルという環境的外部の対照が、農村の人々が織りなす集合的行動パターンと都会の人々が織りなす集合的行動パターンの対照と対応するのは明らかであろう。自然の力による、あるいは、人間の働きかけによる環境的外部の変化は、集合的行動パターンの変化と相即的である。いかに物在的な存在に見えようとも、環境的外部は、それに規定されつつも、それに働きかける集合体にとっての「かや」の構成要件である。

(4) 間主観的外部

集合的主体の側において、集合的行動パターンがすでにコミュニケーションとして織りなされるのと相即して、環境的外部は間主観的外部として集合体に相対する。野球をしている——野球という「コミュニケーションとしての集合的行動パターン」を織りなしている——集合体にとって、グラウンドは、単なる物在的土地としての環境的外部を越えて、種々の暗黙・自明の諸前提を担う環境的外部、すなわち、間主観的外部でもある——投手の後方に広がる土地空間と捕手の後方に広がる土地空間の意味的相違は、選手のすべてにとって、もはや、暗黙・自明の前提の一つであり、したがって、すべてのプレーは、その意味的相違を前提に遂行されるが、その意味的相違が改めて言及されることは決してない。

間主観的外部は、集合体の人々にとって、あくまでも、「外部」なのであり、それについて言及されることも、意識されることも、はたまた、夢に見られることもない。しかし、それは、同時に、集合体の人々が、何かに言及したり、何かを意識したり、はたまた、何かを夢に見ることを可能ならしめる「外部」である。怪獣に追いかけられる夢を見る人は、すでにして、怪獣についての暗黙・自明の諸前提という間主観的「外部」に包まれているからこそ、そのような恐い夢を見ることも可能となる。

間主観的外部は、コミュニケーションが織りなされる過程で、いわば沈澱堆積層のように形成されていく。一つの権益をめぐって争う2つの集団も、2つの集団をひとまとめて一つの集合体とみるならば、その集合体は、争いというコミュニケーションを織りなせば織りなすほど、「その権益が大きな価値を有する」という暗黙・自明の前提を固めていっているとみることもできよう。

精神科医、木村敏⁶⁾が論じる「気」の概念も、間主観的外部の一つとして位置づけることができる。気がある、気が利く、気軽な、気が張る、気が強い・弱い、気が長い・短い、気の毒、気がつく、気になる、気味悪い、気がすむ、気に入る、気にする、気をつける、等々、「気」という言葉の豊富な用例からわかるように、日本語において、心の微妙な動きを表現する上で、「気」という言葉は必須である。しかし、心の動きを表現する場合に、「気」という言葉が使用されるからといって、このことは、「気」が「心」を指すということを意味しない。そうではなくて、「気」は、個人を越えて周囲に拡がり、個人を支配し、規制するものである。「気」は、上記の用例でも、一応は個人のもののような表現形態をとってはいるが、実際には、個人の自由にはならないものの、周囲の情勢次第でいろいろに変化するものなのである。その意味で、木村の言う「人と人との間」にあるものであり、筆者の言う「かや」に対応する。ちなみに、「気」が個人に

よって分有され、個人の支配下に入ったものは、「気分」、「気持ち」と呼ばれる。

3. 「こころ」と「かや」

これまで「かや」——集合体の全体的性質——について述べてきたが、では、「かや」と「こころ」とはいかなる関係にあるのだろうか。この点に論をすめる前に、まず、「こころ」について、廣松の哲学的認識論⁷に基づき、検討を加えておこう。一口に「こころ」とは言うものの、その内実はさまざまである。われわれの心的活動には、事物を知覚する、何かを思い浮かべる（表象する）、何かを考える、夢を見る、等々、さまざまな活動が含まれる。ここでは、紙数の制限上、視覚的な認識を中心にして述べることにする。

われわれが何かを視覚的に認識する場合、常に、眼前にある何か（所与）を、何がしかの意味や価値を担うあるもの（所識）として認識する。今、目の前の机の上にある本をそれとして認識する場合を考えてみよう。机の上にあるのは、いわば「きれいに綴じられた紙束」という所与であるが、その紙束は、単なる「きれいに綴じられた紙束」としてではなく、一冊の「本」として認識される。つまり、われわれにとっての眼前的光景は、「きれいに綴じられた紙束（所与）——一冊の本（所識）」という関係態——一冊の「本」としての「きれいに綴じられた紙束」という「として」関係態——というかたちで、われわれの認識対象となる。さらに、このような「所与—所識」関係態は、多水準的に成立する。例えば、「きれいに綴じられた紙束——一冊の本」という低レベルの「所与—所識」関係態が、今度は、そっくりそのまま所与となり、それが、「執筆中の論文に引用すべき本」という新たな高レベルの所識として認識される。

ここで、「かや」との関係で重要なのが、所与—所識関係態における所識の源泉である。「きれいに綴じられた紙束（所与）——一冊の本（所識）」という関係態の場合、目の前にある「きれいに綴じられた紙束」という所与は、現実に、空間的・時間的に眼前に立ち現れる。その眼前の見え方は、他の時に他の場所で見てきた多数の本とは、必ずや相違点を持つ特個的なものである。しかし、その特個的な所与が、「本」という普遍的なカテゴリー（所識）として認識される——「本」というカテゴリーは、現実的な見え方を異にする多数の「きれいに綴じられた紙束」に対して、普遍的に適用される。

眼前的「きれいに綴じられた紙束」が「本」というカテゴリーとして認識されるということは、単に「本」というカテゴリーとして認識されるということのみならず、同じく普遍的なカテゴリーである「雑誌」、「パンフレット」、「新聞」、等々、あるいは、「鉛筆」、「机」、「カ

バン」等々としては認識されないことをも意味する。もちろん、多くのカテゴリーは、上位・下位カテゴリーの集合として、ある程度、体系化されている。しかし、ある所与が「動物」というカテゴリーではなく、「犬」というカテゴリーとして現実に認識されたということは、それ自体、その認識の特徴を示している。つまり、眼前的「きれいに綴じられた紙束」が「本」というカテゴリーとして認識されるということは、無数のカテゴリーを含むカテゴリー体系の中から「本」という一つのカテゴリーが引き出され、そのカテゴリーとして眼前的所与が把握されるということを意味するのである。

では、そこから「本」という一つのカテゴリーが引き出されてくるところのカテゴリー体系なるものの所在を求めるべしとすれば、どこに求められるのだろうか。カテゴリー体系は、まさにカテゴリー体系全体として成立するのであって、その中の個々のカテゴリーについてみれば、それらは、他のカテゴリーとの相対的区別性においてしか存立し得ない。カテゴリー体系は、いわば、差異の体系である。さて、ある一つのカテゴリーが引き出されるとき、すなわち、そのカテゴリーを所識として何らかの所与が認識されるとき、カテゴリー体系は既に存在していかなければならぬ（既在でなければならぬ）。もし、カテゴリー体系が既在でなければ、その中の他のカテゴリーとの相対的区別性においてしか存立し得ない特定カテゴリーが引き出されることなどあり得ないからである。

このカテゴリー体系の所在こそ、「かや」の四肢的関係態の一項である「間主観的外部」に他ならない。異なる時間と場所において異なる様相で眼前に現れる一群の所与を同一の名称（カテゴリー）で括するか（あるいは、しないか）は、日常のコミュニケーションの中で確定されていく。それは、次第に、コミュニケーションを行う上の暗黙・自明の前提、すなわち、間主観的外部として凝結していく、さらには、日常的な知覚や思考における暗黙・自明の前提ともなっていく。「そのホンとてよ」「ウン、はいコレ」といった家族（集合体の一つ）のコミュニケーションが繰り返される過程で、そのホンが父親の愛読する歴史小説であろうと、あるいは、そのホンが母親の料理の本であろうと、ホンという言葉で括される事物がもつ共通の意味——「本」というカテゴリーの意味——が、暗黙・自明なものとなっていく。

今まででは、専ら、認識の対象について論じてきたが、次に、認識する主体の側に目を転じてみよう。ここで、再び、眼前的「きれいに綴じられた紙束」を「本」として認識する事態を考えてみよう。そのとき、そのような認識を行っているのは、特定の身体的・心的特徴を有する個人、すなわち、特個的な個人である。しかし、その個人が、眼前的「きれいに綴じられた紙束」を「本」と

して認識するとき、その個人は、文字どおり、「当り前に」、そう認識している。では、その「当り前に」とはどういうことであろうか。それは、「自分のみならず、皆がそう認識するように」、あるいは、「人々がそう認識するように」ということであろう。もちろん、そのようなことが個人に意識化されているという意味ではない——それでは「当り前」にはならない。要は、個人がある認識を行うときには、無自覚的に、自分と同様に認識する「人々」が想定されており、その「人々」の一員として認識を行っているということである。言葉をえれば、今自分がなそうとしているのと同様の認識をなす「人々」——集合体——を想定し得てこそ初めて、「当り前に」そう認識できる。

自らと同様の認識をなすであろう「人々」が（無自覚的に）想定し得るためには、現実に、そのような共通の認識が何らかの集合体において成立しており、実際に、自分もその「人々」の一員たることが必要である。言うまでもなく、集合体にそのような共通の認識が成立するとなれば、それは、表情と言語によるコミュニケーションの場をおいて他にない。認識する主体が、ある認識をなし得るためには、すでにして、その認識の基盤となる暗黙・自明の前提（間主観的外部）を共有する集合体のコミュニケーションの網の目に中に、その主体自身が織り込まれていなければならぬ。

4. 豊かな社会と「かや」

前項では、視覚的な認識を例にして、「こころ」の源泉が、「かや」の四肢的関係態における「間主観的外部」および「コミュニケーション」にあることを指摘した。詳述する紙幅はないが、このことは、視覚的認識に限らず、認識、あるいは、判断一般についても妥当する。住民が道路、空港、河川、等々をいかに認識するか、また、市民が都市開発、環境保全、過密—過疎、等々の問題にいかなる判断を下すか、といった現象も、基本的には、同様のメカニズムとして捉えることができる。

では、ここで、「こころ」のあり様を規定する「かや」について、豊かな社会と豊かではない社会とを比較してみよう。本稿の冒頭にも述べたとおり、豊かな社会とは、決して、物質的に不満の余地のない夢のような社会のことを言っているのではない。繰り返しになるが、豊かな社会とは、ほとんどすべての人にとって、明日のパンを思い患い、明日の寒さを怖れる必要のない社会のことである。したがって、逆に、豊かではない社会とは、明日のパンと寒さが主たる関心事であるような社会のことである。明日のパンと寒さへの関心は、それが生理的レベルの関心であるが故に、社会の大部分をおおう「かや」、しかも、他の「かや」に対して基底的な「かや」になる

ことは想像に難くない。豊かではない社会においては、明日のパンと寒さをめぐる基底的な「かや」が存在し、それ以外の多くの「かや」は、その基底的な「かや」との強い関連性を有していたがために、多くの個別的な「かや」の予測は比較的容易であった。言い換えれば、共通の、しかも強大な「かや」に包まれていたために、その中の小さな部分的な「かや」については推測が容易であった。これは、よりもおさず、部分的な「かや」に包まれる人々の「こころ」も、ある程度は、了解が容易であったことを意味する。

しかし、もはや、その巨大かつ基底的な「かや」が消失した豊かな社会においては、個々のローカルな場における「かや」は、まさにそれとして把握する以外にすべはない。そこで、重要なのが、「かや」を把握する方法である。以下、「かや」を測定する方法について、3つの例を紹介してみよう。

5. 「かや」の測定

(1) 集合的地図イメージ

何らかの空間的場所について考えたり、語ったりするとき、われわれは、しばしば、その場所の位置や広さ、あるいは、場所間の距離を前提として、考えたり、語ったりしている。そして、それらの位置、広さ、距離は、必ずしも自分自身によって計測したものではなく、過去の日常経験や学習経験によって獲得されたものであることがほとんどである。このことは、われわれが、その中で日常経験や学習経験を得ることのできる集合体が存在し、しかも、その集合体には、位置、広さ、距離についてのイメージ——集合的地図イメージ——が共有されていることを示唆している。

ここで、関西在住の大学生と福岡県在住の大学生に、関西地方の白地図を与え、府県境やいくつかの有名地点を書き込ませることによって、両者の関西地方に関する集合的地図イメージを比較した研究を紹介しよう⁸⁾。図-4は、白地図を300×300のメッシュに切り、75%以上の被験者が同一府県に認知したメッシュだけを用いて、各府県を描いたものである。これを見ると、福岡県在住者の集合的地図イメージでは、京都府、奈良県、三重県、あるいは、兵庫県日本海側のイメージがほとんど確立されていないことがわかる。また、図-5は、福岡県在住者について、関西新空港の位置イメージの分布を示したものであるが、本調査時点（1992年9月、開港約2年前）における同空港に関する集合的地図イメージの一端をうかがうことができる。

(2) 都市開発をめぐる対立の構図

集合体が「かや」に包まれているということは、決し

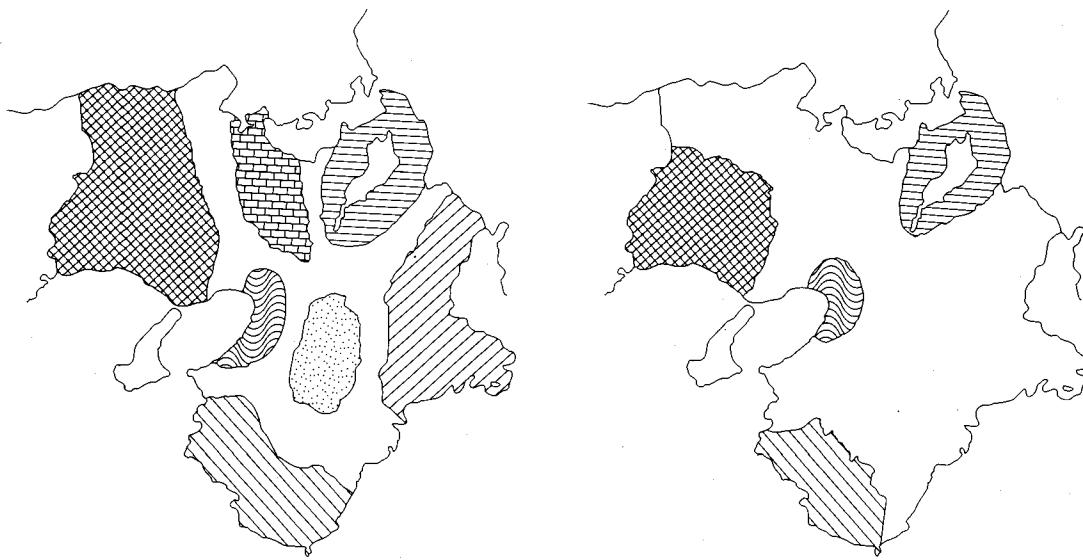


図-4 関西地方の集合的地域イメージ（左は関西在住者、右は福岡県在住者）

て、その集合体の成員同士、あるいは、下位集合体同士が協調的であることを意味しない。前にも述べたとおり、対立し、争いあう2人以上の人間、あるいは、2つ以上の集団をひとまとめに、一つの集合体とみなし、そこでの対立の構図を「かや」として把握することもできる。ゲーム理論は、このような対立の構図を表現する有用な手段である。また、ゲーム理論における均衡解は、ある仮定のもとでその集合体が至るであろう結果的状況を示すものと捉えるならば、それは、その集合体が向かいつつある方向性という集合体全体の性質、すなわち、「かや」の一つを示すものと考えることができる。

ゲーム理論によって対立の「かや」を表現しようとした例として、1990年JR京都駅ビル高層化をめぐる対立に、ゲーム理論の一つである「コンフリクト解析」¹⁰⁾を適用した研究について紹介する¹⁰⁾。当時、建都1200年を契機に、京都市南部再開発の一環として、同駅ビル高層化が計画され、着々と準備が進められていた。それに対して、景観保護の立場から、いくつかの市民団体や京都仏教会が高層化反対を表明していた。また、市民の賛否もほぼ相半ばしていた。

表-1は、現地調査によって推定された当事者（プレーヤー）、各当事者がとり得る選択肢（オプション）、および、各プレーヤーのオプションの組合せ（発生事象）をまとめたものである。表1にある24個の発生事象について、各プレーヤーの選好順序を調査し、部分的なハイパーゲーム（開発会社、反対連合、仏教会は互いの選好を熟知しているが、一般市民の選好に関してだけは各

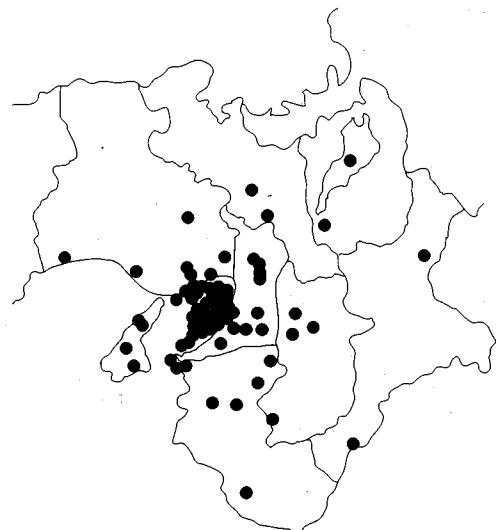


図-5 関西新空港の位置イメージの分布
(福岡県在住者、1992年9月当時)

様の認知をしているハイパーゲーム）として定式化された。コンフリクト解析の結果、「仏教会の強硬手段は発動されるものの、開発会社の原案どおり高層化工事が着工される」という発生事象が均衡解として得られた。本研究の後、当時、駅ビル問題と同時平行的に進行していた京都ホテル建設問題に対する仏教化の対応が必ずしも市民の支持を得られなかつたこととも連動して、仏教会の強硬手段すら発動されることなく、京都駅ビルの高層化工事は始まった。

表-1 京都駅ビル高層化をめぐるコンフリクト解析

開発会社	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0
早期着工	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0
コンセンサス形成	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0
規模縮小	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1
反対連合	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1
市民投票	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1
仏教会	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1
拝観停止	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1
一般市民	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
猛反対	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
十進表現	1	2	4	9	10	12	17	18	20	25	26	28	33	34	36	41	42	44	49	50	52	57	58	60

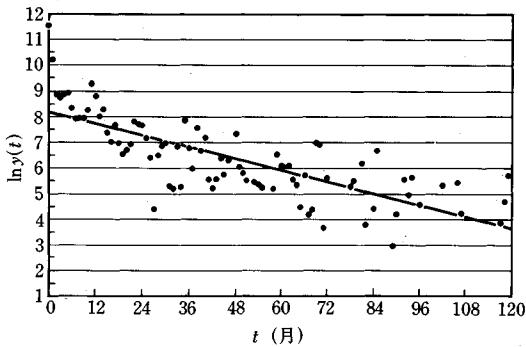


図-6 長崎大水害に関する新聞記事面積の推移

(3) 文献データ・会話の分析

コミュニケーションと、いわばその沈澱堆積層として構成される暗黙・自明の前提（間主観的外部）は、「かや」の構成要素である。新聞、雑誌、等々の出版物にしても、あるいは、日常の会話にしても、それらは、ある一定の暗黙・自明の前提の上に成立すると同時に、それらは、暗黙・自明の前提を形成しもする。したがって、対象とする集合体に広く購読されている新聞、雑誌の記事内容を分析したり、あるいは、集合体の人々の間で行き交っている日常会話を分析することによって、集合体の間主観的外部を探すことができる。

新聞、雑誌、等々の出版物の記事内容を計量的に分析する方法は、内容分析（content analysis）とよばれている。ここでは、内容分析の一例として、1982年長崎大水害に関する地元紙「長崎新聞」の10年間にわたる内容分析について紹介する¹¹⁾。図-6は、同紙における長崎大水害に関する1カ月当たりの記事面積（1行×1段=13文字を1ユニットとしたときのユニット数）の推移を示したものである。ただし、記事を（a）被災、復旧状況に関する事実報道、（b）災害による人々や社会の精神的後遺症に関する報道、（c）防災意識の高揚を意図するキャンペーン的記事、の3つに分類し、（a）あるいは（b）に該当する記事の推移をまとめたものである。線形回帰の結

果は、相関係数-76と、かなりの適合度が得られている。

このような記事面積の指指数関数的減少については、もちろん、防災意識、あるいは、災害記憶の急激な減少を反映するものとの解釈がなされよう。しかし、単なる防災意識あるいは災害記憶の減少だけではかたずけられない一面もある。未會有の災害と形容されるような災害は、発災当初、当事者にとっては、文字どおり、未會有、すなわち、経験したことともないとしてつもないことが起こっていることだけはわかるが、その全貌は、およそ了解不能である。しかし、時間の経過とともに、被災者は、破壊された環境に対して種々の集合的行動パターン——避難、復旧活動、等——を織りなす。また、災害について、さまざまなことを語り合ったり、マスコミ情報に接したりもする。そうするうちに、あの説のわからなかつた災害に関して、一定の理解を得、それを暗黙・自明の前提としつつ、さらなる集合的行動パターンを織りなしていくことになる。こうした過程で、自らを襲った大変化が一体何であったのかについての共通理解が成立し、したがって、新聞報道の必要性も低下の一途をたどるという一面があることを忘れてはならない。

もちろん、どのような共通理解が成立するかは、集合体によって異なってくるし、その違いが、復旧過程や長期的防災行動にも違いを生むであろう。集合体によって暗黙・自明の前提にいかなる類似点と相違点があるかは、一つの研究テーマとなる。発災10年後、長崎大水害についていかなる暗黙・自明の前提が形成されているかについては、いくつかの被災地域住民、防災行政担当者、環境保護ボランティア団体を対象に、日常会話の分析が試みられている¹²⁾。

6. 「かや」の多層的重複構造

これまで、説明の便宜上、集合体が一枚の「かや」に

だけ包まれているかのような論じ方をしてきた。しかし、現実には、一つの集合体をとっても、それがいくつもの「かや」に多層的に包まれているのが常態である。さらには、ある「かや」に包まれる集合体と別のある「かや」に包まれる集合体とが、部分的に重複し合うというような「かや」の重複構造も日常的に観察される。つまり、集合体の常態は、「かや」の多層的重複構造として捉えられるべきである。これを、個人の側からみれば、個人は、多層的重複構造をなす数多くの「かや」の交錯点に位置することになり、いかなる「かや」の交錯点にあるかが、その個人の「こころ」のあり様を規定することになる。

2枚以上の「かや」が重複構造をなすとき、その重複部分に位置する個人（群）は、複数の「かや」と相互規定関係にあるため、それら個人（群）の行動を介して、複数の「かや」の間に連動が生じ得る。場合によっては、それまで別々の「かや」に包まれていた個人群を包み込む新しい「かや」が形成されることも可能である。

従来、2者集団は、集合体の基本ユニットのごとく、格別の地位を与えられてきた。たった一人では、そもそも集合体にならないのであるから、サイズの上で最小という意味では、2者集団は一つのユニットかもしれない。しかしながら、何がしかの重複構造が成立しているのが集合体、引いては社会の常態と考えるならば、2者集団は、決して、「基本的」ユニットとは言えなくなる。2者集団は、2者というサイズ故に、理論上、重複構造を持ち得ないからである。もし、重複構造の存在を集合体の常態とするならば、3者集合体こそ、最小の基本的ユニットと言うべきであろう。作田¹³⁾も指摘するとおり、基本的ユニットとしての2者集団の偏重は、個人主義的世界観、引いては、方法論的個人主義と無縁ではあるまい。なぜならば、個人主義的な「自己」を前提として、その社会的環境としての他者を想定する限り、「自己」および、自分が見つめ見つめられる他者1人から成る2者集団が、自ずと、「基本的」であるかのような様相を帯びざるを得ないからである。

7. 内部者にとっての「かや」の覚識不能性

「かや」に包まれている個人が、自らを包む「かや」を覚識することは不可能である。集合的行動パターンを織りなす集合体内部の個人は、集合的行動パターンに規定されつつも、それを規定するというかたちで、集合的行動パターンの中に織り込まれているのであって、決して、その個人が集合的行動パターンの全貌を把握することはできない。同様に、コミュニケーションにしても、人々は、まさに表情と言語によるコミュニケーションの当事者としてその中に織り込まれているのであって、

コミュニケーションの全貌を把握することはできない。また、間主観的外部は、それが集合体の個々人にとって暗黙・自明の諸前提であることからして、当然、個々人には覚識不能である。環境的外部も、覚識不能な集合的行動パターンの対象であるが故に、その全貌は覚識不能である。

以上の点を踏まえて、ある研究者（あるいは、実践家）が、ある集合体をグループ・ダイナミックスの研究対象にするという事態を描写してみよう。第1に、ある集合体が、ある研究者の関心の対象になるということは、その集合体が何らかの興味ある「かや」に包まれていることを、研究者が感知していることを意味しよう。すなわち、その集合体は何らかの「かや」に包まれており、同時に、研究者自身はその「かや」の外にいる、という構図が成立していなければならない。しかし、第2に、そもそも研究者がその集合体に何がしかの関心を抱くに至ったということ自体、さらには、その集合体の人々と研究者との間に、観察、面接、質問紙調査、等を通じたコミュニケーションが成立するということ自体、研究者とその集合体と共に包み込む「かや」も存在していることを意味している。ただし、この研究者と集合体を包む「かや」については、研究者自身もそれに包まれているが故に、それを研究者が覚識することは不可能である。しかし、研究者は、集合体独自の「かや」の外部者であると同時に、集合体と共に「かや」にも包まれているため、すなわち、2つ（正確には、2群）の「かや」にズレがあるため、研究者は、集合体の人々には覚識できないものを覚識できる。そして、第3に、研究者は、集合体について覚識できた事項を、自分と他の多くの研究者、さらには、一般の人々をも包む「かや」の中でのコミュニケーションに載せていかなければならない。これに成功したとき、初めて研究者の発見が発見として多くの人々の受け入れるところとなる。

重要なことは、グループ・ダイナミックスの研究においては、研究者と研究対象（何らかの集合体）の間に一線を画し、研究者が研究対象を自らとは隔絶された対象として把握することは、原理的に不可能だということである。もし、客観性ということばを、研究者は研究対象と自らの間に一線を画して、研究対象を彼岸の対象として扱うべきだという意味で用いるならば、グループ・ダイナミックスにおいては、そのような客観性は原理的に不可能であるということになる。つまり、グループ・ダイナミックスの方法論では、研究対象との間に決して一線を画し得ないこと、すなわち、「かや」の相対的なズレに基づくより他にないこと、したがって、いかに「かや」のズラシを利用するかが研究の成否を握ること、が銘記されねばならない。

参考文献

- 1) 村上泰亮, 公文俊平, 佐藤誠三郎: 文明としてのイエ社会, 中央公論社, 1979.
- 2) ガルブレイス, J. K.: ゆたかな社会, 岩波書店, 1960.
- 3) 総理府広報室: 月刊世論調査, 1994, 10月号, pp. 52-55.
- 4) 矢守克也, 杉万俊夫: 横断歩道における群集流の巨視的行動パターンの計量に関する研究——コンピューターグラフィックスによる計量, 社会心理学研究, Vol. 7, pp. 102-111, 日本社会心理学会, 1992.
- 5) 矢守克也, 杉万俊夫: 横断歩道における群集流の巨視的行動パターンのシミュレーション, 実験社会心理学研究, Vol. 32, pp. 129-144, 日本グループ・ダイナミクス学会, 1992.
- 6) 木村 敏: 人と人との間, 弘文堂, 1972.
- 7) 廣松 渉: 存在と意味(第1・2巻), 岩波書店, 1982, 1993.
- 8) 矢守克也: 社会的表象としてのメンタルマップに関する研究, 実験社会心理学研究, Vol. 34, pp. 69-81, 日本グループ・ダイナミクス学会, 1994.
- 9) 岡田憲夫, ハイブル, K. W., フレーザー, N. M., 福島雅夫: コンフリクトの数理——メタゲーム理論とその拡張, 現代数学社, 1988.
- 10) 永田素彦, 杉万俊夫: 都市開発をめぐるコンフリクト解析——京都駅ビル高層化問題について, 社会心理学研究, Vol. 9, pp. 48-64, 日本社会心理学会, 1993.
- 11) 杉森直樹, 矢守克也, 岡田憲夫: 防災意識の長期変動に関する基礎的考察, 京都大学防災研究所水資源研究センター研究報告, No. 14, 1994.
- 12) 矢守克也, 永田素彦: 災害イメージをめぐる会話分析研究, 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, pp. 182-189, 1994.
- 13) 作田啓一: 個人主義の運命——近代小説と社会学, 岩波新書, 1981.

(1994.11.11 受付)